

登録有形文化財・浅野川大橋に関する研究

安達 實¹・村田 晶²・宮島昌克³

¹正会員 金沢工業大学客員研究員（〒921-8501 石川県野々市市扇が丘7-1）

E-mail: adachi.makoto@ruby.plala.or.jp

²正会員 金沢大学助教 理工研究域環境デザイン学系（〒920-1192 石川県金沢市角間町）

E-mail: murata@se.kanazawa-u.ac.jp

³正会員 金沢大学教授 理工研究域環境デザイン学系（〒920-1192 石川県金沢市角間町）

E-mail: miyajima@se.kanazawa-u.ac.jp

金沢市には藩政期以来の建造物や町並みが残ることから、2009（平成21）年歴史都市の認定を受けた。加えて金沢の文化的景観、城下町の伝統と文化が2010（平成22）年に国の重要文化的景観に選定された。本研究は、金沢市内の土木遺産のうち、金沢市民に親しまれている浅野川大橋を取り上げ、江戸期から大正期に現橋が架設されるまでの橋の変遷、特に江戸期における橋の建設や管理に関する事柄などについて述べる。

Key Words : 藩政期、浅野川大橋、橋梁管理

1. はじめに

浅野川大橋は、金沢市内を流れる浅野川に架かる国道159号の橋で、1922（大正11）年に架設された鉄筋コンクリート3径間アーチ橋である。周辺の主計町、東茶屋街など古い町並みに溶け込んだ大正ロマンにあふれるその姿は、金沢らしさを象徴する地域の顔として多くの人々に親しまれてきている。



図-1 「金沢市鳥瞰図」 金沢市の浅野川のあたり
昭和7年 吉田初三郎絵（金沢市立玉川図書館蔵）

2. 藩政期の浅野川大橋

藩政期の史料・加賀藩史料から、大橋に関する事柄を取り出してみると、1594（文禄3）年初めての架橋から、藩政末期の1850（嘉永3）年の流失と復旧まで、流失8回、修理および架け替え12回の記録が残っている。これらの史料から、主な出来事を書きだしてみる^{1)~15)}。

○1594（文禄3）年9月 『国初遺文』¹⁾

「金沢両橋架替之事

犀川・浅野川橋手伝の事、能州へも又加州山奥へ越候て、材木を出し候事は許し候

文禄3年9月7日 利家 印」

浅野川大橋は犀川大橋とともに、加賀藩祖・前田利家が今から約400年前に架けたのが最初で、架橋のため木材の切り出しを許可する等の文書が残っている。これが浅野川大橋に関する最初の文書である。当時の大橋は、

木造であるため、絶えず修理せねばならなかった。しかし、緊急の場合を除き、農作業を妨げないために、秋の収穫の後に修理を行った。橋の修理や架け替えの費用負担や管理責任などに関することも、寛永の頃に定められた。

○1594（文禄3）年10月 『国初遺文』¹⁾

「前田利家、金沢町年寄の伏見に來り、犀川・浅野川兩橋の改修を命じたるを謝し、白銀を献じたるを嘉す」

架橋が許可された翌月、金沢から藩主利家のところへお礼に伺っていたことがわかる。

○1633（寛永10）年8月 『国事雜抄』²⁾

「金沢の兩大橋上の荷物運搬に関する法を定める」

○1638（寛永15）年6月 『御定書』²⁾

「往還の道路橋梁に関する費用の支出方法を定める」

○1661（寛文元）年7月 『改作所旧記』³⁾

「荷車を犀川・浅野川の橋爪に繫留するを禁止する」

○1688（元禄元）年8月 『参議公年表』、『前田貞親手記』⁴⁾

「浅野川の橋梁を修繕するを以て、その奉行を命じ、次いで舟橋を架して一時の通行に便す」

以前の大橋は1652（承応元）年に架かり、その後1667（寛文7）年の大水によって、一部流れ、橋板や高欄などの修理を行ったが、今回再び修理することになり、普請奉行の任命があった。また工事中は舟橋を架け、一般の通行の便を図った。その内、修繕や架け替えには仮橋を架けるようになった。

○1742（寛保2）年は歳 『金城深秘録』⁵⁾

「浅野川大橋の長さを減じて改架す」

これまでの大橋は、長さ50間、幅3間であったが、橋台の石垣を押出すことにより、長さを減らすことができるようになった、と記されている。

○1760（宝暦10）年6月 『故紙雜鈔』⁶⁾

「浅野川大橋の改築成り渡橋式を行う。大橋は六月二十一日より渡り初め申候由承及候。今年不思議の事候て舟橋かかり不申候。一文橋・小橋にて相済候由。御儉約故と何茂申候。」

これまでは工事の際、舟橋を架けていたが、この時は御儉約のためか架けなかったとある。また渡り初めを行っていたこともわかる。

○1811（文化8）年4月 『歳々略暦』⁷⁾

「浅野川大橋の改架に着手す。四月十五日より浅野川大橋架け替える。七月上旬迄工手間八百人与云」橋の架け替え工事に、大工や人夫800人を要した。

○1816（文化13）年8月 『歳々略暦』、『内外国事記』、『江戸御留守諸事覚書』⁷⁾

「犀川・浅野川の水暴溢す。金沢八月四日朝より大風雨に御座候処、浅野川橋や浅野川々筋橋々不残流失仕・・・」

大雨で大橋をはじめ、多くの橋が流れた。

○1820（文政3）年6月 『横山氏日記』、『日用雜記』⁷⁾

「大雨により浅野川・犀川の橋梁を損す。

六月九日、今暁より大雨に浅野川・犀川共満水、両橋共橋杭拔損、往来相成不申。」

雨が多く、兩大橋が流れ、往来出来なくなった。この年の災害で堤防を損することが多かったことから、河川堤防を今後一層強固にするように、藩から関係者に文書がでた。

○1837（天保8）年10月 『毎日帳書抜』⁸⁾

「兩大橋の橋梁を架け替えて工匠をして職を得しむ」

幕末の天保期は凶作が続き、生活困窮者が多いことから、職人で困っている人を救済するため、痛みかけた浅野川大橋と犀川大橋の架け替えに取り掛かり、これに従事させた。不況対策として公共事業を興すのは今も昔も同じである。

○1850（嘉永3）年9月 『成瀬正敦日記』、『文慶雑録』⁹⁾

「大雨、浅野川・犀川両大橋流失」

大雨で、溺死者13人、被害のあった家は3300余の大災害となった。この時、小橋の上で指揮していた藩の横目山田吉郎右衛門が流され、翌日松寺あたりで相果てた姿で見つかったとある。

このように大雨による流失、修理や架け替えを繰り返しながら明治を迎えた。

3. 藩政期・浅野川大橋の参考絵図

藩政期の浅野川大橋に関する参考絵図を図一2～図一5にそれぞれ示す。図に示すように藩政期より主要街道に架かる橋梁として重要であることが窺える。



図一2 「金府大絵図」の浅野川大橋
(金沢市立図書館蔵)¹⁴⁾



図一3 「農業図絵（金沢図）」
尾張町から橋場町付近 （個人蔵）¹⁵⁾



図一4 「金沢城下図屏風（浅野川口町図）」
浅野川大橋 （個人蔵）¹⁵⁾

4. 明治期の浅野川大橋

藩政期に架け替えた大橋が腐朽して危険になったので、石川県は1873（明治6）年7月架け替えの儀を大蔵省へ伺い、1876（明治9）年、本格的な架け替えに着手した。図一6に明治9年の浅野川大橋架渡仕様帳（工事設計書）の一部を、表一1に浅野川大橋の概要をそれぞれ示す。この架け替えに入用となった材料は、主として丸太などの木材である。金物はカスガイ、釘、つなぎ金物などで、金物全体では約950貫が必要であり、在材使用の金物350貫、残りは新材である。橋脚橋杭の周りは戸室石を積んだ。この架け替えは1877（明治10）年1月23日に完成した。



図一5 「加賀藩年中行事図絵」
藩政末期頃の大橋（金沢大学蔵）¹⁵⁾

表－1 1877（明治10）年完成の浅野川大橋概要

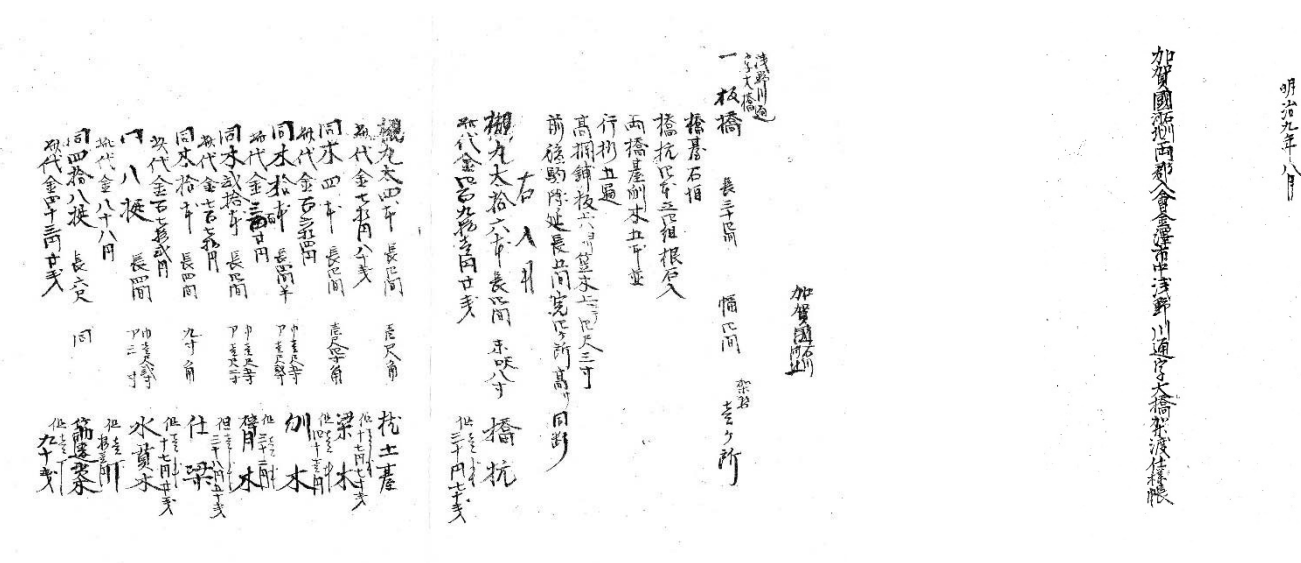
場所	加賀国石川・河北両郡入会 浅野川大橋
橋長	34間
幅員	4間
構造	木造板橋 5主桁 5径間 橋台石積み2基、橋脚木杭4本立て4基
工事費	1万0973円
うち諸色代（材料費）	9108円
人夫賃	1144円
諸職賃	721円

表－3. 1922（大正11）年完成の浅野川大橋概要

橋長	30間
幅員	車道41尺 うち電車軌道16尺 歩道5尺を両側に 合わせて51尺
構造	モニエル式鉄筋コンクリートアーチ 3連 中央径間 55尺、側径間53尺
使用材料	コンクリート 311立方坪 鉄筋（丸鋼） 99トン
工事費	上部工3連 69,900円 下部工（橋台2基、橋脚2基） 28,300円 旧橋撤去 6,900円 計105,100円

表－2 1903（明治36）年完成の浅野川大橋概要

橋長	34間	幅員	4間
構造	木造板橋	明治10年完成のものと同じ	
工事費	9800円		



図－6 明治9年の浅野川大橋架渡仕様帳（工事設計書）の一部

概要を示す。浅野川大橋の完成開通時は、たいへんな賑わいになったことが、翌日の北国新聞や風俗画報が伝えられている。当時の新聞は写真がなく記事のみでその盛況を伝えている。

8月16日渡橋式の数日前からこの式を見るため、市民や近郷近在の人々が押しかけ人の山が築かれたと記されている^{10)～12)}。

5. 大正期の浅野川大橋

その後交通頻繁なる市内の交通要路になってきたことと、市内電車敷設の必要上、永久橋に架け替えることになり、1921（大正10）年9月着工、翌1922年12月完成した^{10)～12)、16)}。概要を表－3に、側面図等を図－7に、完成渡橋式写真を写真1, 2に示す。

そのまま残し、この橋の持つ重厚なイメージが周辺の景観によく調和し、美しい姿が川面に映えるよう、日夜努力されている国土交通省の方々に感謝したい。

参考文献

- 1) 前田育徳会編：加賀藩資料 第一編, pp. 501-502, 1929.
 - 2) 前田育徳会編：加賀藩資料 第二編, p. 709, pp. 866-867, 1930.
 - 3) 前田育徳会編：加賀藩資料 第三編, p. 941, 1930.
 - 4) 前田育徳会編：加賀藩資料 第四編, pp. 966-968, 1931.
 - 5) 前田育徳会編：加賀藩資料 第七編, pp. 163-164, 1934
 - 6) 前田育徳会編：加賀藩資料 第八編, p. 167, 1935.
 - 7) 前田育徳会編：加賀藩資料 第十二編, p. 65, pp. 510-512, pp. 936-937, 1939.
 - 8) 前田育徳会編：加賀藩資料 第十四編, pp. 839-840, 1941.
 - 9) 前田育徳会編：加賀藩資料 藩末・上編, pp. 240-241, 1958.
 - 10) 金沢市：稿本 金沢市史市街編第一, pp. 172-175, 1916.
 - 11) 金沢市：金沢市史 資料編17建築・建設, pp. 399-401, 1998.
 - 12) 石川県：石川県の近代化遺産, pp. 76-77, 2008.
 - 13) 田中徳栄：加賀藩大工の研究, 桂書房, pp. 276-282, 2008.
 - 14) 平凡社：金沢・北陸の城下町, pp. 10-11, 1995.
 - 15) 石川県立歴史博物館：城下町金沢の人々, pp. 70-71, p.83, p.114, 1999.
 - 16) 道路改良会：本邦道路橋輯覧, p.129, 1926.
 - 17) 文化庁文化財部編：総覧登録有形文化財 建造物 5000, p.87, 2005.
 - 18) 土木学会：日本の近代土木遺産－改訂版, pp. 156-157, 2005.
- その他一般的な文献として、
国土交通省、石川県、金沢市などが発行したパンフレットや、各種辞典（事典）などの資料を参考にした。
- (2016. 4. 11 受付)